

芥川龍之介

煙草と悪魔



煙草と悪魔

煙草は、本来、日本になかった植物である。では、何時頃、舶載されたかと云うと、記録によつて、年代が一致しない。或は、慶長年間と書いてあつたり、或は天文年間と書いてあつたりする。が、慶長十年頃には、既に栽培が、諸方に行われていたらしい。それが文禄年間になると、「きかぬものたばこの法度はつとぜにはつと法度、玉のみこゑにげんたくの医者」と云う落首らくしゆが出来た程、一般に喫煙が流行するようになった。――

そこで、この煙草は、誰の手で舶載されたかと云うと、

歴史家なら誰でも、ポルトガル葡萄牙人とか、スペイン西班牙人とか答える。が、それは必ずしも唯一の答ではない。その外にまだ、もう一つ、伝説としての答が残っている。それによると、煙草は、悪魔がどこからか持って来たのだそうである。そうして、その悪魔なるものは、天主教の伴ばて天連れんか（恐らくは、フランスしやうにん上人）がはるばる日本へつれて来たのだそうである。

こう云うと、切支丹宗門の信者は、彼等のとがパアテルを誣しいるものとして、自分を咎めようとするかも知れない。が、自分に云わせると、これはどうも、事実らしく思わ

れる。何故と云えば、南蛮の神が渡来すると同時に、南蛮の悪魔が渡来すると云う事は——西洋の善が輸入されると同時に、西洋の悪が輸入されると云う事は、至極、当然な事だからである。

しかし、その悪魔が実際、煙草を持って来たかどうか、それは、自分にも、保証する事が出来ない。尤もアナトオル・フランスの書いた物によると、悪魔は木犀草もくせいそうの花で、或坊さんを誘惑しようとした事があるそうである。して見ると、煙草を、日本へ持って来たと言ふ事も、満更嘘だとばかりは、云えないであろう。よし又それが嘘

にしても、その嘘は又、或意味で、存外、ほんとうに近い事があるかも知れない。——自分は、こう云う考えで、煙草の渡来に関する伝説を、ここに書いて見る事にした。

* * *

天文十八年、悪魔は、フランス・ザヴィエルに伴ついている伊留満いるまんの一人に化けて、長い海路を恙つつがなく、日本へやって来た。この伊留満の一人に化けられたと云うのは、正物しょうぶつのその男が、阿媽港あまかわか何処かへ上陸している中に、一行をのせた黒船が、それとも知らずに出帆ほげたをしてしまったからである。そこで、それまで、帆桁ほげたへ尻

尾をまきつけて、さかさま倒にぶら下りながら、ひそか私に船中の容子を窺っていた悪魔は、早速姿をその男に変えて、朝夕フランス上人に、給仕する事になった。勿論、ドクトル・ファウストを尋ねる時には、赤い外套を着た立派な騎士に化ける位な先生の事だから、こんな芸当なぞは、何でもない。

所が、日本へ来て見ると、西洋にいた時に、マルコ・ポオロの旅行記で読んだのとは、大分、容子がちがう。第一、あの旅行記によると、国中至る処、黄金がみちみちているようであるが、どこを見廻しても、そんな景色

はない。これなら、ちよいと磔くるすを爪でこすって、金にすれば、それでも可か成なり、誘惑が出来そうである。それから、日本人は、真珠か何かの力で、起死回生の法を、心得ているそうであるが、それもマルコ・ポオロの嘘らしい。嘘なら、方々の井戸へ唾を吐いて、悪い病さえ流行はらせれば、大抵の人間は、苦しまぎれに当来はの波羅ら葦い僧そなどは、忘れてしまう。——フランシス上人の後へついて、殊勝らしく、そこいらを見物して歩きながら、悪魔は、私ひそかにこんな事を考えて、独り会心の微笑をもらしていた。

が、たった一つ、ここに困った事がある。こればかりは、流石の悪魔が、どうする訳にも行かない。と云うのは、まだフランス・ザヴィエルが、日本へ来たばかりで、伝道も盛にならなければ、切支丹の信者も出来ない。ので、肝腎の誘惑する相手が、一人もいないと云う事である。これには、いくら悪魔でも、少からず、当惑した。第一、さしあたり退屈な時間を、どうして暮していいかわからない。――

そこで、悪魔は、いろいろ思案した末に、先園芸まずでもやって、暇をつぶそうと考えた。それには、西洋を出る

時から、種々雑多な植物の種を、耳の穴の中へ入れて持っている。地面は、近所の畠でも借りれば、造作はない。その上、フランスス上人さえ、それは至極よかろうと、賛成した。勿論、上人は、自分についている伊留満いるまんの一人が、西洋の薬用植物か何かを、日本へ移植しようとしていたのだと、思ったのである。

悪魔は、早速、鋤すきを借りて来て、路ばたの畠を、根気よく、耕しはじめた。

丁度水蒸気の多い春の始で、たなびいた霞かすみの底からは、遠くの寺の鐘が、ぼうんと、眠むそうに、響いて来

る、その鐘の音が、如何にも又のどかで、聞きなれた西洋の寺の鐘のように、いやに冴えて、かんと脳天へひびく所がない。——が、こう云う太平な風物の中にいたのでは、さぞ悪魔も、気が楽だろうと思うと、決してそうではない。

彼は、一度この梵鐘ぼんしやうの音を聞くと、聖保羅さんぽろの寺の鐘を聞いたよりも、一層、不快そうに、顔をしかめて、むしろように畑を打ち始めた。何故かと云うと、こののんびりした鐘の音を聞いて、この曖々あいあいたる日光に浴していると、不思議に、心がゆるんで来る。善をしようと呼ぶ気

にもならないと同時に、悪を行おうと云う気にもならず
 にしまう。これでは、折角、海を渡って、日本人を誘惑
 に来た甲斐がない。——てのひら掌まめに肉豆がないので、イワン
 の妹に叱られた程、労働の嫌な悪魔が、こんなに精を出
 して、鋏を使う気になったのは、全く、このややもすれ
 ば、体にはいかかる道德的の眠けを払おうとして、一生
 懸命になったせいである。

悪魔は、とうとう、数日の中に、畑打ちを完おわって、耳
 の中の種を、その畦うねに播まいた。

*

*

*

それから、幾月かたつ中に、悪魔の播いた種は、芽を出し、莖をのばして、その年の夏の末には、幅の広い緑の葉が、もう残りなく、畑の土を隠してしまった。が、その植物の名を知っている者は、一人もない。フランシス上人が、尋ねてさえ、悪魔は、にやにや笑うばかりで、何とも答えずに、黙っている。

その中に、この植物は、莖の先に、簇々そうそうとして、花をつけた。漏斗じょうごのような形をした、うす紫の花である。悪魔には、この花のさいたのが、骨を折っただけに、大へん嬉しいらしい。そこで、彼は、朝夕の勤行ごんぎぎょうをすまし

てしまふと、何時でも、その畑へ来て、余念なく培養につとめていた。

すると、或日の事、（それは、フランシス上人が伝道の為に、数日間、旅行をした、その留守中の出来事である。）一人の牛商人うしあきんどが、一頭の黄牛あめうしをひいて、その畑の側を通りかかった。見ると、紫の花のむらがつた畑の柵の中で、黒い僧服に、つばの広い帽子をかぶった、南蛮の伊留満が、しきりに葉へついた虫をとっている。牛商人は、その花があまり、珍しいので、思わず足を止めながら、笠をぬいで、丁寧にその伊留満へ声をかけた。

——もし、お上人様、その花は何でございます。

伊留満は、ふりむいた。鼻の低い、眼の小さな、如何にも、人の好きそうな紅毛こうもうである。

——これですか。

——さようでございます。

紅毛は、畑の柵によりかかりながら、頭をふった。そうして、なれない日本語で云った。

——この名だけは、御気の毒ですが、人には教えられません。

——はてな、すると、フランス様が、云ってはなら

ないとしても、仰有おつしやったのでございますか。

——いいえ、そうではありません。

——では、一つお教え下さいませんか、手前も、近ごろはフランシス様の御教化をうけて、この通り御宗旨に、
帰依して居りますのですから。

牛商人は、得意そうに自分の胸を指さした。見ると、成る程、小さな真しんちゆう鍬の十字架が、日に輝きながら、頸くびにかかっている。すると、それが眩しかったのか、伊留満はちよいと顔をしかめて、下を見たが、すぐに又、前よりも、人なつこい調子で、冗談ともほんとうともつか

ずに、こんな事を云った。

——それでも、いけませんよ。これは、私の国の掟おきてで、人に話してはならない事になっているのですから。それより、あなたが、自分で一つ、あててごらんなさい。日本の人は賢いから、きつとあたります。あたったら、この畑にはえているものを、みんな、あなたにあげましよう。

牛商人は、伊留満が、自分をからかっているとも思ったのであろう。彼は、日にやけた顔に、微笑を浮べながら、わざと大仰に、小首を傾けた。

——何でございますかな。どうも、殺急さつきゆうには、わかり兼ねますが。

——なに今日でなくっても、いいのです。三日の間に、よく考えてお出でなさい。誰かに聞いて来ても、かまいません。あたったら、これをみんなあげます。この外にも、珍陀ちんたの酒をあげましょう。それとも、波羅韋僧埵はらいそてれ阿利あるの絵をあげますか。

牛商人は、相手があまり、熱心なのに、驚いたらしい。

——では、あたらなかったら、どう致しましょう。

伊留満は帽子をあみだに、かぶり直しながら、手を振

って、笑った。牛商人が、聊いささか、意外に思った位、鋭い、鴉からすのような声で、笑ったのである。

——あたらなかつたら、私があなたに、何かもらいましょう。賭かけです。あたるか、あたらないかの賭です。あつたら、これをみんな、あなたにあげますから。

こう云う中に紅毛は、何時か又、人なつこい声に、帰っていた。

——よろしゅうございます。では、私も奮発して、何でもあなたの仰有るものを、差上げましょう。

——何でもくれますか、その牛でも。

——これでよろしければ、今でも差上げます。

牛商人は、笑いながら、あめうし黄牛の額を、撫でた。彼はどこまでも、これを、人の好い伊留満の、冗談だと思っ
ているらしい。

——その代り、私が勝ったら、その花のさく草を頂き
ますよ。

——よろしい。よろしい。では、おんあるじ確に約束しましたね。

——おやくじよう確に、御約定致しました。おんあるじ御主エス・クリスト

の御名にお誓い申しまして。

伊留満は、これを聞くと、小さな眼を輝かせて、二三

度、満足そうに、鼻を鳴らした。それから、左手を腰にあてて、少し反り身そになりながら、右手で紫の花にさわって見て、

——では、あたらなかつたら——あなたの体と魂とを、貰いますよ。

こう云って、紅毛は、大きく右の手をまわしながら、帽子をぬいだ。もじやもじやした髪の毛の中には、山羊のような角が二本、はえている。牛商人は、思わず顔の色を変えて、持っていた笠を、地に落した。日のかげつたせいであろう、畑の花や葉が、一時に、あざやかな光

を失った。牛さえ、何におびえたのか、角を低くしながら、地鳴りのような声で、唸っている。……

——私にした約束でも、約束は、約束ですよ。私が名を云えないものを指して、あなたは、誓ったでしょう。忘れてはいけません。期限は、三日ですから。では、さようなら。

人を莫迦ぼかにしたような、慇懃な調子で、こう云いながら、悪魔は、わざと、牛商人に丁寧なおじぎをした。

*

*

*

牛商人は、うっかり、悪魔の手にのつたのを、後悔し

た。このままで行けば、結局、あの「じゃぼ」につかま
って、体も魂も、「亡ぶることなき猛火」に、焼かれな
ければ、ならない。それでは、今までの宗旨をすてて、
波宇寸低茂はうすちもをうけた甲斐が、なくなってしまう。

が、御主おんあるじエス耶蘇ス基督クリストの名で、誓った以上、一度した約
束は、破る事が出来ない。勿論、フランスス上人でも、
いたのなら、またどうにかなる所だが、生憎、それも今
は留守である。そこで、彼は、三日の間、夜の眼もねず
に、悪魔の巧みの裏をかく手だてを考えた。それには、
どうしても、あの植物の名を、知るより外に、仕方がな

い。しかし、フランシス上人でさえ、知らない名を、どこに知っているものが、いるであろう。……

牛商人は、とうとう、約束の期限の切れる晩に、又あの黄牛あめうしをひっぱって、そつと、伊留満の住んでいる家の側へ、忍んで行った。家は畑とならんで、往来に向っている。行って見ると、もう伊留満も寝しずまったと見えて、窓からもる灯さえない。丁度、月はあるが、ぼんやりと曇った夜で、ひっそりした畑のそこそこには、あの紫の花が、心ぼそくうす暗い中に、ほのめいている。元来、牛商人は、覚束ないながら、一策を思いついて、や

つとここまで、忍んで来たのであるが、このしんとした景色を見ると、何となく恐しくなつて、いつそ、このまま帰つてしまおうかと云う気にもなつた。殊に、あの戸の後では、山羊のような角のある先生が、因^{いんへる}辺留濃の夢でも見ているのだと思うと、折角、はりつめた勇氣も、意気地なく、くじけてしまふ。が、体と魂とを、「じやぼ」の手に、渡す事を思えば、勿論、弱い音^ねなぞを吐いているべき場合ではない。

そこで、牛商人は、毘^び留善麻利耶^{ぜんまりや}の加護を願いながら、思い切つて、予^{あらかじめ}、もくろんで置いた計画を、実行し

た。計画と云うのは、別でもない。——ひいて来た黄牛の綱を解いて、尻をつよく打ちながら、例の畑へ勢よく追いかんでやったのである。

牛は、打たれた尻の痛さに、跳ね上りながら、柵を破って、畑をふみ荒らした。角を家の板目はめにつきかけた事も、一度や二度ではない。その上、蹄ひづめの音と、鳴く声とは、うすい夜の霧をうごかして、ものものしく、四方あたりに響き渡った。すると、窓の戸をあけて、顔を出したものがあつた。暗いので、顔はわからないが、伊留満に化けた悪魔には、相違ない。気のせいか、頭の角は、夜目な

がら、はっきり見えた。

——この畜生、何だつて、己の煙草畑を荒らすのだ。悪魔は、手をふりながら、睡むような声で、こう怒鳴った。寝入りばなの邪魔をされたのが、よくよく癩にさわったらしい。

が、畑の後へかくれて、容子ようすを窺うかがっていた牛商人の耳へは、悪魔のこの語が、泥烏須でうすの声のように、響いた。

……

——この畜生、何だつて、己の煙草畑を荒らすのだ。

*

*

*

それから、先の事は、あらゆるこの種類の話のように、至極、円満に完おわっている。即すなわち、牛商人は、首尾よく、煙草と云う名を、云いあてて、悪魔に鼻をあかさせた。そうして、その畑にはえている煙草を、悉く自分のものにした。と云うような次第である。

が、自分は、昔からこの伝説に、より深い意味がありはしないかと思っている。何故と云えば、悪魔は、牛商人の肉体と靈魂とを、自分のものにする事は出来なかつたが、その代に、煙草は、あまね 殆く日本全国に、普及させる事が出来た。して見ると牛商人の救きゆうばつ拔が、一面墮落

を伴っているように、悪魔の失敗も、一面成功を伴って
いはしないだろうか。悪魔は、ころんでも、ただは起き
ない。誘惑に勝ったと思う時にも、人間は存外、負けて
いる事がありはしないだろうか。

それから序ついでに、悪魔のなり行きを、簡単に、書いて
置こう。彼は、フランシス上人が、帰って来ると共に、
神聖なペンタグラマの威力によって、とうとう、その土
地から、逐おいほら払われた。が、その後も、やはり伊留満のな
りをして、方々をさまよって、歩いたものらしい。或記
録によると、彼は、南蛮寺の建立前後、京都にも、屢しばしば々

出沒したそうである。松永弾正を翻弄した例の果心居士かしんこじと云う男は、この悪魔だと云う説もあるが、これはラフカディオ・ヘルン先生が書いているから、ここには、御免を蒙る事にしよう。それから、豊臣徳川両氏の外教がいきょう禁遏きんあつに会って、始の中こそ、まだ、姿を現わしていたが、とうとう、しまいには、完まったく日本にいなくなつた。

——記録は、大体ここまでしか、悪魔の消息を語っていない。唯、明治以後、再、渡来した彼の動静を知る事が出来ないのは、返えす返えすも、遺憾である。……

(大正五年十月)

日本文学電子図書館

煙草と悪魔

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館